

# 江戸時代の益田の産業遺産マップ



喜阿弥焼窯跡

江戸時代の益田を  
楽しみましょう



江戸時代の益田市域は、石見銀山料(幕府領)と津和野藩領・浜田藩領に分かれ、しかもそれらが複雑に入り組んでいました。しかし、平和な時代に様々な産業が発展し、その遺産が各地にみられます。

島根県益田市



令和4年度文化芸術振興費補助金(地域文化財総合活用推進事業)

## 石見銀山料

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家は、石見銀山のある石見国を重視し、津和野藩領を除く地域を天領として直接支配しました。

しかし、津和野藩が増(領地を追加で与えられること)され、元和5年(1619)に浜田藩が新たに成立するなどして、次第に縮小していきました。

支配にあたったのは石見銀山奉行、後に大森代官で、代官所は石見銀山のある大森に置かれました。

## 津和野藩

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い後、現在の鹿足郡一帯を治めていた吉見氏が毛利氏に従って長門国(山口県北部・西部)に移ると、坂崎出羽守直盛が3万石を与えられ、津和野藩が成立しました。坂崎直盛は元和2年(1616)の大坂夏の陣で活躍し、さらに1万石を与えられましたが、同年に坂崎家は取り潰されてしまいます。

翌3年、因幡国(鳥取県東部)鹿野の亀井氏が4万3千石を与えられ、以後、江戸時代を通じて亀井家が津和野藩を治めます。決して大きな藩ではありませんでしたが、文化に力を入れた藩でした。

## 浜田藩

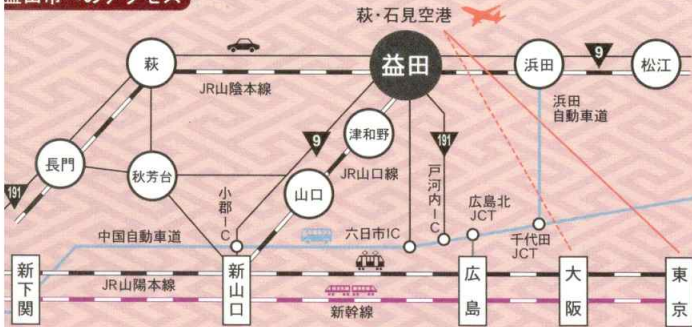
元和5年(1619)、伊勢国(三重県)松坂の古田重治が浜田5万5千石を与えられ、浜田藩が成立しました。古田家は慶安元年(1648)に断絶し、翌2年に松平(松井)周防守家が新たに藩主となりました。

宝暦9年(1759)、松平(松井)周防守家に代わり本多家が藩主となりますが、明和6年(1769)に再び松平(松井)周防守家が再び藩主となります。

天保7年(1836)、松平(松井)周防守家に代わり松平(越智)家が藩主となり、幕末まで続きます。

このように浜田藩は複雑な変遷をたどりしました。

## 益田市へのアクセス



- [東京から]\*飛行機 羽田空港⇒萩・石見空港(約90分) 運航: ANA
- [大阪から]\*バス 高速バス・夜行バス(約8時間) 運行: 石見交通・阪神バス・中国JRバス  
\*飛行機 伊丹空港⇒萩・石見空港(約60分) 運航: ANA ※夏季限定  
\*自動車 中国道⇒浜田道浜田IC⇒国道9号⇒益田(約6時間)
- [広島から]\*バス 高速バス(約3時間20分) 運行: 石見交通  
\*自動車 広島道⇒中国道戸河内IC⇒国道191号⇒益田(約2時間20分)
- [松江から]\*鉄道 JR松江駅⇒JR益田駅(特急 約2時間)  
\*自動車 山陰道⇒国道9号⇒益田(約3時間)
- [萩から]\*鉄道 JR東萩駅⇒JR益田駅(約70分)  
\*自動車 国道191号⇒益田(約70分)
- [九州・関門海峡から]\*鉄道 九州各地⇒JR新山口駅⇒JR益田駅(新山口-益田間: 特急 約90分)  
\*自動車 九州各地⇒中国道小郡IC⇒国道9号⇒益田(小郡IC-益田間: 約90分)

## お問い合わせ

一般社団法人 益田市観光協会

F 698-0024 島根県益田市駅前町17番2号

TEL: 0856-22-7120

E-mail: info2@masudashi.com



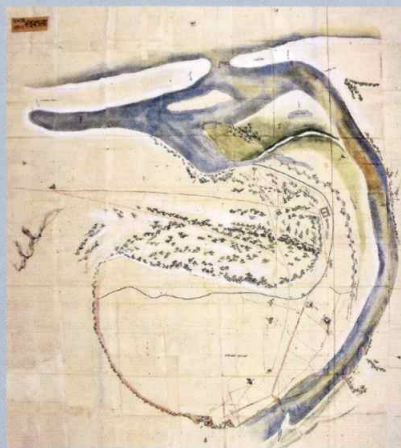
江戸時代の益田の産業遺産マップ

1023年2月20日第1版発行

発行] 益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会

編集] 株式会社フタバ

デザイン・印刷] 株式会社フタバ



石見国高津川水域大絵図  
(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

この面では、19世紀初頭に作成されたと考えられる、島根県立古代出雲歴史博物館所蔵「石見国高津川水域大絵図」などを参考に、江戸時代の高津の町の様子を復元しています。江戸時代の高津は、津和野藩の重要な港町であり、様々な施設が置かれていました。一部、浜田藩領の飛地もありました。



**凡例**  
**青字** 江戸時代の施設  
 場所はおおよその位置  
**赤字** 現在も残る施設

江戸時代の高津  
 地理院地図を加工して作成

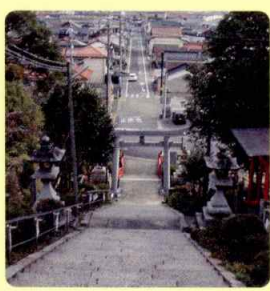


ばんりゅうこ そすい  
**① 蟠竜湖疎水**

高津の沖田は、開けた土地がありながら、用水に恵まれず、水田を開くことができませんでした。高津の庄屋・長嶺嘉左衛門(唯心居士)は、蟠竜湖から隧道により水を引くことを計画し、津和野藩の許可を得て開削に取り組み、宝永4(1707)年頃、完成させました。隧道の長さは180m余り、幅50~60cm、高さ2.7~3.6m、人力による工事は一大事業でした。これにより、沖田だけでなく、浜・下開作地区まで田を開くことができました。長嶺嘉左衛門の墓はもと唯心寺にありましたが、現在は高津の大元神社にあります。また、万葉公園に顕彰碑も建てています。

たかつかきのもと  
**② 高津柿本神社の門前町**

高津柿本神社は、歌聖柿本人麿を祀る神社です。江戸時代初めには高津の松崎にありましたが、延宝9(1681)年に津和野藩主龜井茲親によって中世に高津城があった現在地に移転しました。松崎にはその経緯を記した松崎の碑が建てられましたが、現在は恵美須神社・金刀比羅神社境内の連理松跡に移されています。



ろうざあと  
**③ 蛭座跡**



蛭座の石臼

津和野藩では、ぼげ(ぼげ)の實を集め、製蛭が行われ、特産品としていました。宝暦12(1762)年、津和野の城下町にあった蛭座が櫛の實の集積や積み出しに便利な高津に移され、さらに文化8(1811)年に若干場所が移動しました。蛭座で使われていた石臼が恵美須神社・金刀比羅神社の境内に展示されています。

**きあみ**  
**3 喜阿弥焼窯跡**  
 安政元年(1854)に那賀郡神主村(現在の江津市二宮町神主)出身の吹原繁蔵によって開かれました。雑器を主に焼きました。民衆の暮らしの中に美を見出し、「民芸」を提唱した柳宗悦(1889-1961)にも高く評価されました。昭和20年(1954)に廃窯しました。

**くにさきじへえ**  
**1 国東治兵衛頌徳碑、国東治兵衛の墓**  
 江戸時代の中頃、遠田村の国東治兵衛は、量に使うられる量表の材料の蘭草の栽培を国東半島(大分県)から導入し、さらに備後国(広島県東部)を参考に改良して、量表は遠田や津田の特産品となりました。この地方の紙漉の導入にも貢献しています。



**おおくぼ ひろかね せきしゅう**  
**6 大久保 広兼 石州和紙資料館 要予約** ホームページ <https://masudashi.com/kankouspot/kankouspot-724/>  
 江戸時代に浜田藩の御用紙漉を務めた広兼家に伝わった紙漉道具や美術品・古文書が展示されています。囲炉裏のある「かみの宿」での宿泊も可能です。  
 [住所] 益田市美都町都茂 3045 [入館料] 大人(高校生以上) 500円  
 [TEL] 0856-52-2508 小人(小中学生) 200円  
 [開館時間] 10:00~16:00 [休館日] 12月~3月 毎週火曜日  
 ※資料館までの道路は一部未舗装です。



江戸時代に浜田藩の御用紙漉を務めた広兼家に伝わった紙漉道具や美術品・古文書が展示されています。囲炉裏のある「かみの宿」での宿泊も可能です。  
 [住所] 益田市美都町都茂 3045 [入館料] 大人(高校生以上) 500円  
 [TEL] 0856-52-2508 小人(小中学生) 200円  
 [開館時間] 10:00~16:00 [休館日] 12月~3月 毎週火曜日  
 ※資料館までの道路は一部未舗装です。



**2 右田本店**  
 江戸時代の初め頃、領主益田氏が去ったことで益田がさびれることを憂いた益田氏の元家臣右田宗味は、酒造業を始めるとともに、宗味市という定期市を開きました。  
 写真は酒蔵

**5 美濃地の一里塚**  
 江戸時代、主要な街道に一里(約4km)ごとに目印として設置されたものです。土を盛り上げた塚に木が植えられました。美濃地の一里塚は、津和野藩の城下町と港町の飯浦をつなぐ飯浦街道に置かれたもので、益田市内で最もこのりよい一里塚です。

江戸時代 中頃の 益田市域の村	凡例	益田 津見	浜田藩領 石見银山料	横田 七村	津和野藩領 浜田藩領(1619~1647, 1785~1865) 石見银山料(1648~1785)
-----------------------	----	----------	---------------	----------	---

**旧街道**  
 江戸時代の益田市には主要な街道として、浜田藩の城下町浜田と津和野藩の城下町津和野をつなぐ「(旧)山陰道」と、津和野藩領の飛び地をつなぐ「津和野奥筋往還(石見中通り往還)」がありました。また、長門国(山口県北部・西部)まで通じる「長門道」や、中国山地を越えて安芸国(広島県西部)に通じる道などがありました。

**4 棚田**  
 「日本のピラミッド」とも言われる棚田は、益田市内でも各所に見られます。中でも中垣内の棚田は、大道山の麓の谷間に沿って棚田がところせましと並び、日本の棚田百選にも選ばれています。



**わりもと**  
**7 旧割元庄屋美濃地屋敷**  
 江戸時代にたたら業で栄え、浜田藩匹見組の割元庄屋(複数の村で構成される組を支配する庄屋)であった美濃地家の屋敷(主屋と米蔵は国登録有形文化財)を改修し、所蔵していた民俗文化財を展示しています。  
 [住所] 益田市匹見町道川150 [TEL] 0856-58-0250  
 [入館料] 無料 [開館時間] 10:00~16:00  
 [休館日] 冬季(12月中旬~3月中旬) 月曜日(祝日の場合は翌平日)



江戸時代にたたら業で栄え、浜田藩匹見組の割元庄屋(複数の村で構成される組を支配する庄屋)であった美濃地家の屋敷(主屋と米蔵は国登録有形文化財)を改修し、所蔵していた民俗文化財を展示しています。  
 [住所] 益田市匹見町道川150 [TEL] 0856-58-0250  
 [入館料] 無料 [開館時間] 10:00~16:00  
 [休館日] 冬季(12月中旬~3月中旬) 月曜日(祝日の場合は翌平日)

**8 匹見の山林産業**  
 匹見の豊かな山林は、多くの恵みをもたらし、人々は山林資源を糧に生業を立てていました。木地師は轆轤師ともいい、轆轤を用いて椀や盆など木地の器を作りました。匹見には木地師の権利を保障する木地屋文書や、木地師の墓、轆轤など、木地師に関する文化遺産が多数伝わります。杣人の里でもあり、たくさんの材木が伐り出されました。たたら製鉄は燃料として多くの木が必要で、山間部で営まれました。たたら場の遺跡が点在します。高度経済成長以前は、炭焼きを行う人も多く、炭焼き窯の跡が各所に残ります。匹見ウッドパークではそのような匹見の山林産業の歴史を学べます。

